

小澤竹俊 聴く力で患者に寄り添う、看取りを支える人材育成の伝道師

文 高橋 誠

Text by Mac Takahashi

・ 学校法人慈恵大学広報推進室長
・ 医療・健康コミュニケーションライター

Medical Health 医療・健康分野のスーパーパイオニアたち

医療分野の戦略的勉強会に小澤医師が緊急招聘されました。

登壇した小澤医師は、団塊の世代がすべて75歳以上となる2025年問題に向け、「社会保障費は増加の一途。援助職は慢性的な人手不足。このままでは超高齢少子多死問題は深刻化し、在宅医療は崩壊する。できるだけ多くの仲間を増や



小澤医師の最新刊
「死を前にした人になんかは何ができますか?」
(医学書院)

どこに住んでいても、どんな病気で安心して人生の最後まで過ごせる社会を目指し、小澤医師は8名の常勤医とともに日常の地元訪問診療に力を入れる傍ら、ほとんどの週末を各地域で援助職を担う人材育成の活動に充てている。

「反復」、「沈黙」、「問いかけ」——訪問診療医・小澤竹俊医師（めぐみ在宅クリニック院長、横浜市）が、患者の本音を引き出すメソッドです。2017年3月、NHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」でこの援助的コミュニケーションが紹介された反響は大きく、同年7月、政治家、官僚、医療関係者など50名が集う

「反復」「キーワードを繰り返す」、「沈黙」(大切な話を待つ間)、「問いかけ」(相手の支えを顕在化する)で本音を引き出す援助的コミュニケーションの「聴く力」とは、単に相手の話を聴くのではなく、患者の「苦しみ」や「わかってほしい」ことを聴く力です。これは在宅医療に限

自宅での幸せな最期を支える「聴く力」援助職を支える「レジリエンス(折れない心)」

限られた医療資源(人・物・金)の中で、サステナビリティ(持続可能性)を実現するには、一人一人のレジリエンス(折れない心)の教育が必要です。誰かの支えになろうとする援助職こそ、一番、支えを必要としているのです。

「聴く力」と訴えました。普段は「聴く力」に満ちた穏やかな小澤医師ですが、「誰かを批判しても社会は良くなる」とは限らない、仲間を集めて行動することが大切」という鬼気迫る思いが「話す力」として爆発したように見えました。

「聴く力」を通じて、患者の本音を聴き出すだけでなく、患者の「苦しみ」や「わかってほしい」ことを聴く力です。これは在宅医療に限らず社会コミュニケーション全てに通底するのではないのでしょうか。小澤医師が啓発する人との関わり方は、親の介護と仕事の両立で悩む40〜50代のビジネスパーソンにも、日々の行動選択の羅針盤となるでしょう。



Profile

学校法人慈恵大学広報推進室長。医療・健康コミュニケーション。
東京生まれ横浜育ち。慶応義塾大学経済学部卒。ミスノ広報宣伝部、リクルート広報企画部、米国SPBC社New Design Conceptor (LA在住12年)、仙生露Executive PR Adviser、富士1ばんゴルフ副支配人/経営企画室長/広報室長を経て、2004年より現職。日米複数企業における広報・マーケティング経験から、難解な医療・健康をわかりやすくメディア・社会に伝えるべく、病院広報担当者間の勉強会「病院広報研究会」を立ち上げ、医療・健康コミュニケーション活動を研究中。趣味はゴルフ(Hdcp9)、ワイン(日本ソムリエ協会ワインエキスパート#58)。